

地域と教育力

内山雄平

はじめに

「新潟から日本の教育を考える」を起点に、地域に住んでいる者の主体性のことからものを考え新潟県の教育改革の可能性を探ろうと、新潟県の地域の教育に関わる調査研究に取り組んできた。

戦前の国家統制の教育を転換させ、戦後の教育基本法のもとで民主主義社会の実現をめざし、民間教育運動の「地域に根ざした教育」は、学習指導要領に縛られて実施される学校教育をより豊かに子どもたちの成長・発達を促すものである。

この地域に根ざす教育が新潟ではどのように展開されたか、その豊かな教育に、研究所は何を学び父母県

民にどう発信してきたかを見ていきたい。

1 「地域の教育力」のすばらしさ

—教育の真実を発見

(1) 干溝小学校統廃合の経過

北魚沼郡小出町立干溝小学校は、1874（明治7）年創立され、地区のまとまりの中心として運営され、地域の文化の核であった。干溝小学校統廃合問題は、その存続にかけた15年の教育運動である。

1984（昭和59）年7月、当時の町長は、町議会に干溝小学校の廃止と同町の小出小学校への統合を提案し、議会はこれを承認した。同町長は、干溝小学校の存続を公約し、町長に当選した人物であり、町議会で干溝小学

校の廃止が承認される1ヶ月前に住民と念書を交わし（統合は住民の合意なしでは強行しない）、その旨を確認していた。行政の最高責任者が学区住民の間で協定を締結しながら、これを簡単に反故にしたのである。

同年11月16日、父母36名は通学指定処分を取り消しを裁判と、チラシを撒き「子どもの教育を最優先させた円満解決ができるように」と全町の住民に訴えた。

翌85（昭和60）年1月小出小への就学指定変更処分の取り消しを求めて新たに本訴を提起したが和解が成立せず、同年3月請求却下の決定がなされ、同時抗告、教育に無理解な高裁も5月却下した。

しかし、干溝住民の、子どもへの思い、地域・学校を愛する熱い気持ちは県内外の共感呼び、支援の輪も広がった。県教組、高教組、私教連、新潟大学教授などが呼びかけ人になって、「干溝小廃校に反対する住民を支援する会」が結成され、学校教育が父母・地域住民の教育参加と協力なしには成り立たないことを県民に訴えた。

1985年4月小出小学校に統合されてからも、地域住民の集落開発センターを使用し「自主干溝小学校」が開始され、児童39名中25名が通う。3ヶ月100日間

に及ぶ。研究所の所員が自主学校に協力した。7月、自主学校を閉じ、全児童が小出小に通学することとなる。
 (2) 学校に対する熱い思いと地域の教育力―「干溝の灯」を日本の灯へ

研究所は、三輪定宣氏（千葉大教授）とともに干溝小の学校統廃合の調査・研究に入り、この研究で地域に根ざす「小さな学校」の意義を再考し、学びとり、ひいては日本の教育の改善、改革に生かしうる「教育学の宝庫」の内実をそなえていることを明らかにした。その主な点は、以下のとおりである。

○教育方法の特色：「その日の顔色、表情、一つの返事からさえ心の動きを読み取る」という生活観察、授業づくりを行う上で「個人記録の集積、分析、活用」を重要な指針とし、少数数の利点を徹底的に追求する、「一人も落ちこぼしをつくらない、さじを投げない」を合い言葉に実践を展開。

○複式学級のすすめ方：異学年集団における意見の分化・対立（集団思考）を重視し、「思考性の多様性と質の高さ」を求める主体的学習が追求されている。

○地域の教育力の再生：「教育と生活の結合」を求め、地域の自然や住民の影響力を意図的・計画的に取

り込む。

・親子ぐるみで「農園づくり」を展開：教師と父母と子どもたちが一体となって地域環境に働きかけ、地域のすばらしさを知り、子どもが親の苦労や技術について学ぶ、

○どの子も出番と学ぶ喜びの味わえる学校：1974年初めて北魚沼郡の卓球大会に4・5年生を交え6年生全員が出場で団体優勝の栄冠を得た。小出中学校に進学しても生徒会長、副会長、書記など役員となり、少人数で人間的葛藤がなく社会性に乏しく、切磋琢磨がないなどは実態を知らない誇りでしかない。

〔教育情報〕13号・25号、教育が「地域に根ざす」とは？前田昌子（鹿児島大学教育学部）、教育経営学研究紀要 2013-09-30、九州大学大学院人間環境学府、三輪定宣「小さな学校が消えた」エイデル研究所1988年10月参照

2、地域が教育の土壌をつくる

―新潟市大江山地区

大江山地区は新潟市東南部に位置し、15集落からなる農村地帯、信濃川と阿賀野川に挟まれた「輪中」と

いわれる強湿地帯で胸までつかる田圃で稲作が行われていた。亀田郷土地改良区との共同で昭和30年代の初めに乾田化がなされた。農業従事者が減少する一方で周辺部は都市化・混住化が進んでいる。

(1) 住民による住民のための保育園

地域住民の要望で営まれていたお寺（真光寺）の季節保育園が、住民の手による「地域立」の保育園に生まれ変わった。

設立の運動に農協婦人部が大きな役割を果たし、佐藤幸蔵大江山農協組合長によって公費による通年制の新設の道が開かれた。地域住民の要望と討論に基づき、プレイデッキ（冬期の運動不足を解消するための中2階の回廊）、床下暖房（冬でも裸足で遊ばせる）、自然と太陽をいっぱい取り入れ、農作業が見える建物の三面採光で実現できた。これには「子どもが建物で育つ」という橋本忠美氏（東京工業大学）の設計と亀田郷地域センターの設計者として、地域づくりの観点を取り入れた。また、自然や地域との関わりを深めるため、近くの畑を借り野菜を作り、秋には収穫祭で会食する。給食も地域の農産物を利用した手作りのもの。

この運動の中心を担った高橋武昌さん（南中野山小）

は「常に住民とともに生き、その生産や暮らしの中に深く眼を向ける中から要求が掘り起こされ、地域住民の教育、保育に対する悩み、願いに根ざすなら、必ずそこからエネルギーが生み出される。何としてでも豊かな子どもを育てたいという願い―その中にこそ、地域を自分たちの手で創つていく主体性の原点がある」と指摘する。

(2) 地域の教育力を支える子育てネットワークづくり
大江山地区は、地域ぐるみの教育活動の中で、住民の自主的自治的な数多くのサークルや団体の共同と連帯で、地域の教育力を支えている。青少年育成協議会(略して「育成協」)、小中学校PTA、地域づくり推進委員会、老人クラブ、教職員組合、農協労組など22団体である。

とりわけ、1977年に発足した半官制である育成協は、大江山の地域教育活動をリードする運動の核となる。そのきっかけは1978年の「暴走族追放宣言」である。

「親が悪い」だけでは解決にはならない、大江山の日常の暮らしの中に暴走族になるような状態が生まれ

ているのではないか、その実態調査を小中高1200人対象に取り組む。その結果は「大江山の子よすやかに伸びよ、家庭・地域への子育て提言」としてまとめ、1350世帯全戸に配布、これをもとに15集落すべてで「子育て懇談会を」毎年開催する。

しかし、1984年喫煙事件をきっかけに教師への犯行、エスケープ、いじめ、万引き、校舎破壊などが次々と起こる。これを受け、「非行・タバコ問題とどう取り組む」、「中学生の生き方を考える」、「父親の役割」など、高校教師・県外の講師を招き学習会を重ねるなど、「子どもたちのためならやれることはすべてやろう」と、父母が自らの頭で考え、父母の側から活動を提起していく。

子どもたちの教育を学校任せにはしない熱意は、「地域の教育力」、「地域の『食』」、「地域の教育運動の実践に学ぶ」をテーマに「子育て・教育研究集会」を開催、自らの子育て運動に生かす。

(3) 地域の人々に学ぶ労働体験

生徒の眼を家庭、地域に向けさせるねらいで、夏休み中、地域での労働体験(2年生)をレポートにまとめるという取り組みである。受け入れる人の「体験学

習地図」をPTAが作成し、その中から生徒が選ぶのである。寺の掃除、レンコン掘り、家畜の世話、野菜の種まき・移植、竹籠や花器づくり、亀田甚句など多彩で、かつての日暮里中学校の修学旅行（長野・安曇野）と同様、自然や労働を通して生徒たちが生き方を学び、その中で変わっていく生徒の体験学習は、地域のもつ潜在的な教育力を掘り起こす試みでもあった。

この間の子育て運動をとおして、佐藤一弥育成協会長は「父母住民のなかに次々と生まれる新しい可能性、内発的な発展の可能性を見つけそれを運動化すること。それは地域に人間らしさを取りもどすことを基本に親も子も住民も人間としての全面発達を保障する運動を求めている」と語る。

〔教育情報〕13号1987・3、25号1990・1、
「自然と人間を結ぶ」115号農文協1991・1

3、見直したい学びの場・地域の教育力

(1) 地域に根ざした小さな学校

1) 福島・喜多方小学校「農業科」の実践

福島県喜多方市は、2007（平成19）年構造改革特区の認定を受けて「農業科」が設置され、小学校3

〜6年生に教科目として「総合的学習時間」を活用し展開された。農業科の設置は、子どもに農業を学ばせるべきと主張しているJ-T生命誌研究館の中村桂子氏の考えに共感した市長の発案である。

市内の6年生のUさんは、「土作りから、うね作り、種植え、草むしり、収穫、調理そして最後は食べるまで自分たちで行います。そしてどの作業もみんなで力を合わせて行います。（中略）田んぼに足を入れたときのあの感触。『くちよ』。田んぼでしか味わえない気持ちのよさです。（中略）苗は青々と元気に育ち、命を持ちました。だから、私は、田植えをしながら、『命を植えているんだな。』そして「なるほどな、種が育ち、それが稲となり、米ができる。つまり、米自身を米を作るんだ。それを助けるのが人間なのだ」と書き、農がもつ子育ての力は凄い。

「農業科」には、教員および子どもを指導援助するために、「農業科支援員」を置く。「農業科」は、田も畑も人も地域に支えられて可能なのだ。子どもは実践を通して、支援員から農の営みと命の尊さ、環境との共存、あるいは力をあわせることを学ぶ。

〔教育情報〕100号2009・2参照

2) 南魚沼市・栃窪小学校―地域ぐるみで子どもを守る

南魚沼市立(旧塩沢町立) 栃窪小学校は、豊かな自然に恵まれた創立130年余の、複式3学級の特認校である。老朽化した危険校舎の補修を請願した際、町長から塩沢小学校との統合案がだされた。集落では折々の会議がある度に存続か統合かの議論が7、8年も続いた。同学区の岩野沢集落が小出小学校に統合したあと、町長は統合の是非を問うてきた。

栃窪集落では、高校生以上の大人全員(約230人余、無記名のアンケートを実施。その結果、存続(校舎建替え)に賛成98%。町単独の予算案(約3億円)が計上されたが、賛成議員が少数とみて「学校は地域の生命線……」の趣意書をもって全議員一人一人に陳情・説得にあたる。結果は16対5で可決された。校舎は2004年10月完成。その直後中越大地震が発生、住民は学校に避難、学校が地域にあることの意義をあらためて確認しあつた。

新校舎はできたが、集落の子どもの減少は続き、危機感をもった区長さんは「学校は地域の核。住民も努力しなければ……」と「学校存続対策委員会」を発足さ

せ、学校と住民との論議を重ねた結果、「昔から伝わる農法で無農薬の米作りとその販売」を学校の特色づくりのテーマとした。

苗を植える前の「田植え枠」を転がす作業から始まり、田植え、無農薬なので田の草取りを3年生以上は何回もする。そして、稲刈り・天日干しのためのハザ木かけ・脱穀など一連の作業を昔から伝わる米づくりを古老に教わり、米づくり労働の厳しさを体験する。収穫した米はリュックにかついで東京・銀座の「吉水旅館」の店先で揃いの法被姿で5・6年生が販売する。また、ユネスコ無形文化遺産の「越後上布」の原料となるカラムシの収穫、皮剥、糸にするまで総合的学習時間に体験する。

栃窪地域では、順調に赤ちゃんが5人も産まれ、元気で活力を象徴する各賞状が集落センターにずらりと並ぶ。

栃窪の住民の学校に対する熱い思いは、学校存続が、生活基盤の地域を守ることであり、子どもを育てる地域や農の持つ教育的価値を見いだし、学校とともに生きていくことに他ならない。

(「教育情報」101号2010・3参照)

(2) 学校を地域に開き、伝統芸能を継承する佐渡の小中学校

研究所は2004年一市一島に大合併した佐渡市において、それから生ずる問題を明らかにするため7ヶ年余りをかけ、境野健児氏(福島大学教授)の協力を得て調査研究を実施した。その調査研究の一端を紹介したい。ここでは、地域文化として定着している歌舞伎、鬼太鼓、文弥人形、狂言を見てみよう。

1) 伝統芸能を演じることも

①地芝居「歌舞伎」と表現力：台詞を覚えることから始まり、節回し、立ち振る舞い、首や手の動かし方など仕事を指導者の動きから学ぶ。怒った眼、悲しみの眼など眼の開け方、身のこなし方などを他ではできないような表現力を身につける。

②狂言・文弥人形と中学生：狂言の台本にふりがなをつけ、普段使用しない言葉を読み、発音する練習をする。発音が上手になるとさらに大きな声も大きくなり、子どもの達成感が叶えられる。文弥人形は一つの人形を一人で操る。手や頭、首の動かし方など、テープの弾き語りに合わせて人形の動きを創る。こうしたことが可能なのは指導者が地域の人形使い師で、学区の矢

柄地区には約140年前から継承されている文化があるからである。

③子どもを育む鬼太鼓：大人の鬼太鼓と相まって「地域の精神的支柱」と言われ、小学校1年からバチさばきができ、力強く堂々と演じるリズム感には驚く。鬼舞の舞方は、知識ではなく、技や勘を伝えている。5・6年生は鬼の面づくりに取り組む。

2) 地域から学校をなくす学校統廃合

多くの学校が総合的学習の時間に文化や自然を教育活動に取り入れているのは、豊かな地域文化の土壌があるからである。これを支えているのは教育委員会が「佐渡学」という地元学を提唱し奨励しているからといえる。「佐渡学」では佐渡固有の自然、歴史、文化を学ぶことを重視している。

ところが、佐渡学の提唱とは逆に地域から学校をなくす統合は、子どもの育ちの場と、豊かな地域文化を大切にしている学校が消え、学校が頼るべき地域、頼るべき文化をも失う。佐渡学とは矛盾する学校統合の提案であり、佐渡市の教育行政が問われる。

(「教育情報」106号2011.6参照)

おわりに

全国学力テストが再開して以来ますます反復練習が繰り返され、自分で考え、自分で調べて自分で探すと、人がやっていることを学ぶ、こうした学習が非常に弱くなっているといわれる。

父母が地域に眼を向け、地域の良さを再発見し、教育に参加することによって、学校が豊かな子どもたちを育む様子が、これまでの報告の中に見いだすことができる。

また、いずれの学校も地域の農のもつ教育力が子どもへの育ちに生かされている。

地域社会と学校が結び合うことで、農の営みの世界から命の尊さ、自然環境、技術、知識を学ぶ。本の知識だけでは得ることができないこと、人々が暮らしのなかで維持してきた知恵や技術を学び、人間の知恵のすごさを知るのである。地域に存在する価値を、学校が地域に開くことで子どもに伝えていく。

地域の人々の間に蓄えられてきた力や思いを掘り起こし集めそれに学ぶ「地域に根ざす教育」そのものの実践を展開している。

(うちやまゆうへい・所員)

人間の本质をふまえた多様な実践を

本誌・創刊号の冒頭に川合章さん(埼玉大教授)は、要旨、次のように述べられた。

県内各地で講演等と呼ばれ学んだが、教育に関する各方面に、建て前とホンネが大きくくいちがっているのに、そのことを余り意に介しない傾向があるのではないか。『新潟の教育情報』誌がそのずれをうめる役割を担って欲しいものです。本当に教育をすすめる力をもつのは、子どもと地域に直接かわる教師です。自由を求めてやまない人間の本质をふまえ、社会の進歩に照準をすえた民主教育の原則をふまえ、子どもと地域の実態に即した多様な教育実践の実現を望みます、と。

研究所設立に向け、教育学者で寺泊出身の川合章さんを迎えた集会后、長崎明・八木三男・木村隆利さんらとの会食に参加したことがあります。新潟県の教育や研究所への課題と期待が、今に続いているのではないかと思います。

因みに推薦の書は、川合章『教育研究 創造と変革の50年』(星林社、1999年)です。(河合)